〈論　文〉

慈円再興の四天王寺聖霊院絵堂九品往生人についての試論
―霊告との関わりから―

石川温子

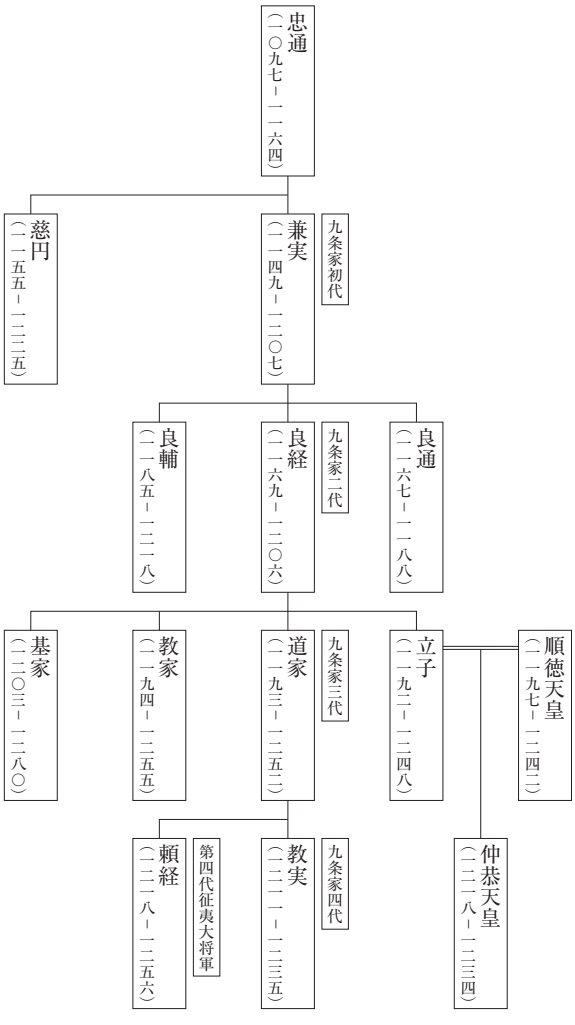
一．はじめに

大阪・四天王寺寺域の東南の一角を占め、聖徳太子をまつる聖霊院には、「聖徳太子絵伝」を描く絵堂が建つ。現在で七代目となるこの絵堂の興りは古く、既に奈良時代・八世紀半ばには存在していた[1]。『天王寺秘訣』「絵堂事」の記載は、四天王寺の絵堂が太子没後から一三〇年後の七五二年頃に建立されたことを伝えている。

絵堂は、歴史の中で焼亡・倒壊と再建を繰り返し今に至る。初代の絵堂は天徳四年（九六〇）に焼失し、二代目が平安時代・十一世紀半ば頃に再建され、一一四三～五八年の間に倒壊してしまう。長く倒壊したままだった絵堂を貞応三年（一二二四）に再建したのが、歌人や『愚管抄』の作者としても名高い、九条家出身の天台僧・慈円（一一五五～一二二五）である。

当時慈円は四天王寺別当の座にあり、絵堂の再建はその最晩年の事績として位置づけられる。慈円再興の絵堂の様子は、知恩院蔵「法然上人行状絵図」（国宝、十四世紀初頭）巻第十五第三段の詞書が詳細に伝えており、その独自性は予て注目されるところである（口絵1）。

これによれば、絵堂には表面に聖徳太子絵伝、裏面に和漢の往生伝を典拠とする九品の往生人を描いた絵があった。九人の往生人そ



九条家略系図

れぞれには、公卿が詠じた漢詩と和歌が添えられ、さらに南北には四天王像が描かれていた。絵は法眼尊智に任され、他筆を交えなかったという。なお九品とは『観無量寿経』が説く、極楽浄土に生まれ変わる際の九つの階位のことである。

これまで、この慈円再興絵堂の九品往生人図については、美術史、歴史、文学など多方面から考察が重ねられており、概ね慈円の浄土教信仰により自身と九条家の後世を祈ったものとの解釈が定着している[2]。そうした解釈について、筆者も否定するものではないが、しかしこの絵堂の再興には慈円の別の祈りがむしろ深く込められているように思われる。そこで本稿では、九品の往生伝の内容と慈円の晩年の思想傾向とを合わせて考察し、その構想の解釈を試みる。

二．慈円について

慈円再興の絵堂を考えるにあたり、その生涯を振り返る必要がある。以下に多賀宗隼氏の論考に従い、慈円の生涯を紹介しておく[3]。

武士の中央政治進出の契機となった保元の乱（一一五六）の前夜、久寿二年（一一五五）、慈円は藤原忠通（一〇九七～一一六四）の子として生まれた（〈九条家略系図参照〉参照）。母は藤原仲光の女、同母長兄は九条家の祖・兼実（一一四九～一二〇七）である。二歳で母、十歳で父と死別し、十一歳で叡山青蓮院門跡の覚快法親王（一一三四～一一八一）の室に入った。この出家はおそらく兼実が決めたものである。十三歳で覚快の三条白川房で出家し道快と名乗り、嘉応二年（一一七〇）十六歳で一身阿闍梨に補任されている。

安元二年（一一七六）には青蓮院門跡に属する無動寺に入り千日入堂を行うなど、仏道修行への厳正な態度が看取できる。千日入堂中の治承二年（一一七八）には、兼実の奔走により、九条家所属の法性寺座主に補せられている。千日入堂を終えた同三年には兼実を訪ね、籠居願望を伝えるも制止されたという。同四年には、最終的に下山を決め、交衆の覚悟を固めている。

治承五年（養和元年、一一八一）には法印に叙され、慈円と名を改めている。また同年には青蓮院門跡に属する三昧院、成就院の検校職への補任など、位階や要職が次々に舞い込んでいる。寿永元年（一一八二）に、またも兼実の尽力により無動寺検校の座を襲った。

平家滅亡後の文治二年（一一八六）には、源頼朝（一一四七～一一九九）と手を結んでいた兼実が、頼朝の推挽により後鳥羽天皇（一一八〇～一二三九）の摂政となった。一方慈円は、同年九条家所属の平等院執印、翌年同属の法成寺執印に就任し、これにより、慈円は青蓮院門跡継承者として任ずべき主な寺院の要職を全て兼ねることとなった。さらに兼実の推挙により建久三年（一一九二）には三十七歳で一度目の天台座主に補任され、また後鳥羽天皇の護持僧になる。このように、慈円の前半生の栄達は、九条家の基盤を固めたい兼実の不断の尽力によるところ大きかった。

建久七年（一一九六）の政変で兼実が失脚すると、慈円も天台座主を辞して籠居している。ただし慈円は後鳥羽院の信任篤かったと見え、正治二年（一二〇〇）には院の眷願により、承久の乱頃まで続く朝廷のための祈祷を再開した。

建仁元年（一二〇一）には天台座主に還補し、祈祷の功により翌々三年、大僧正に任ぜられた。元久二年（一二〇五）には、自房である三条白川房に大懺法院を建て、上皇・朝廷のための祈祷の道場とした。兼実が死去した承元元年（一二〇七）の十一月、寛弘九

年（一〇一三）以降天台が独占してきた四天王寺別当に補せられた。

なおこの時点で、将来を嘱望された兼実の長男・良通（一一六七～八八）は夭折しており、摂政となっていた次男・良経（一一六九～一二〇六）も頓死してしまい、兼実は失意のうちに最晩年を過ごしたと想像される。九条家の未来は、四男・良輔（一一八五～一二一八）と良経の長男である幼い道家（一一九三～一二五二）に託された。以後慈円は、兼実・良経の子弟の後見役として、兄に代わり大黒柱となり、九条家を支えていくこととなる。

四天王寺別当を一年で辞した慈円は西山に五年程籠居し、時折院のための祈祷を行なっている。建暦二年（一二一二）三度目の座主となり、翌建保元年（一二一三）座主を辞した。同年二度目の四天王寺別当、四度目の天台座主となった。今度の四天王寺別当補任期間は、没するまでの十二年間に及ぶ。

その後、院との政治的な対立から承久元年（一二一九）には院の前より退き、約二十年継続してきた朝廷のための祈祷を辞めている。この年、第三代将軍源実朝（一一九二～一二一九）が暗殺後され、道家の三男・三寅（一二一八～一二五六、後の頼経、第四代将軍）が頼朝の遠縁にあたることから、その後継者としてとして迎えられた。慈円は頼経の下向を、紛糾が続く公武関係の解決の鍵と捉え喜んでいる。この頃慈円が神仏へ願文を捧げて公武の協調を祈願していることが現存する願文類から知られる。また『愚管抄』の成立も頃かと推定される。

承久三年（一二二一）の乱の勃発後の、貞応元年（一二二二）十二月、大懺法院を白川の故地に再建し、朝廷のための祈祷を再開している。「大懺法院再興願文」に、朝廷と武家将軍とを併せ祈り、公武のための祈祷の道場とすると規定している。

また四天王寺の復興整備にも注力しつつ、叡山には山王十禅師の礼拝講を整えるなど、老病を推して両寺の興隆のために周旋奔走している。貞応三年（一二二四）の四天王寺絵堂の再建は、慈円最晩年の一大事業であった。嘉禄元年（一二二五）九月二十五日、叡山山麓の東坂本大和荘において多くの弟子が見守る中、七十一歳の生涯に幕を下ろした。

慈円はその生涯で四度天台座主の座に就き、後鳥羽院の護持僧などを勤め、仏教界の頂点に登りつめた。同時に九条家の出身として兼実、良経、道家まで、代々の摂関の補佐役を担い、出家者でありながら、宮廷に出入りする地位と資格を持ち政治の中枢に身を置き続けた。

また歌人としても名高く、九条家歌壇、後鳥羽院歌壇などの中心的歌人として多くの歌会、歌合に参加した。建仁元年（一二〇一）に設置された『新古今和歌集』撰進のための和歌所の寄人にも加えられ、同集の入選歌数は西行についで第二位、九十二首に及んでいる。その家集は『拾玉集』は、慈円の和歌数千首を伝存している。『拾玉集』には和歌のほか、その思索なども記録されており、慈円研究の基礎資料の一つとして知られ、青蓮院に存する五巻本が最も由緒正しきものとして多賀氏により紹介されている。[4]

聖徳太子への思慕は若き日から抱いてきたとは思われるが、特に最晩年に顕著であり『拾玉集』の中に収録された、二度目の四天王寺別当就任の建保七年（一二一九）に聖徳太子の聖霊に捧げた百首（難波百首）などによく表れている。[5]例えば、初めの一首「南無帰命敬礼救世観世音かかる契りはあらじとぞ思ふ」には、聖徳太子を

救世観音の化身とする信仰が見出せる。また『愚管抄』巻第三には仏法により王法を保護し、慈円の理想とする王法仏法相即の政治を体現した人物として太子を崇めている。さらに別当時代には年に一度の聖霊会に加えて、毎月の聖徳太子講会を興すなど、その熱心な信仰を伝える(6)。

三．慈円再興の絵堂の概要

慈円が再興した絵堂の概要について確認しておこう。まず構造については、川岸宏教氏によれば後世の絵図から次のように推測できるという(7)。すなわち、絵堂は聖霊院内の西南隅の位置にあり、東向きに、正面七間、側面二間の平面に、単層で檜皮葺、入母屋造の屋根を持っていたという。内部は母屋と廂の間との中間、西・南・北の三面を、板塀または障子で仕切っていた。その仕切りの内側三面に聖徳太子絵伝、外側西面に九品往生人、南北両袖板の裏面に四天王立像が二体ずつ描かれていたとされる。

絵堂の絵の内容について最も豊かな情報量を持つ、知恩院所蔵「法然上人行状図絵」巻十五第三段冒頭の詞書には次のようにある。

> 四天王寺の別当に補任せられし時は大僧正行慶寺務の時顚倒して後としひさしくなりにし絵堂を新造して漢家本朝の往生伝をゑらひ尊智法眼におほせて九品往生人を画図にあらはし入道相国頼実公以下九人の秀才をすゞめて和歌を詠して九品面〻の行状を称嘆し菅宰相于時大蔵卿為長をして四韻の周詩を賦せしめ権大納言教家卿色紙形をそ清書せられける所謂

慈円が四天王寺の別当に補任された際に、かねて別当行慶の代（一一三五～一一五八）より倒壊したままであったところ新造し、漢家と本朝の往生伝を選び尊智法眼に九品の往生人を描かせ、藤原頼実以下九人の才ある者に和歌を詠じて、九品往生の行状を讃嘆させ、菅原為長に漢詩を詠じさせた。その色紙紙の清書は九条教家に任された。

それに続き、九品住生人詩歌が示される。次にこの絵堂に押された色紙形に記載された、慈円の絵堂復興の趣意を述べた銘文が記され、その成立の経緯がより仔細にわかる。冒頭の詞書と重複する内容が多いが、次の通りである。

> 色紙形記銘云
>
> 貞応三年甲申始自去冬三春孟夏之間以絵師法眼尊智、守本様依伝文図絵既訖、今於西面更画作九品往生之人、殊勧進一乗浄土之業、表裏共不交他筆、尊智図之、以詩歌形其心、詩句九品同令菅大符卿為長卿作之、和歌丞相以下広勧九人、各詠一首、復当南北裏同画四天像、此堂大僧正行慶寺務之間顚倒之後、以聖霊院礼堂東廂為其所、今新建立于旧跡、彰興隆之本意也
>
> 別当前大僧正法印大和尚位慈円記之

これによれば、貞応二年冬から翌年の四月にかけて、絵師法眼尊智が、伝文により本様を守った図を描き、西面には更に九品往生人を画して、一乗浄土の業を勧める。表裏共に他筆を交えず、尊智がこれを描いた。詩歌でもってその心を表し、九品の詩は菅原為長に作らせ、和歌は丞相以下の九人に各一首を詠むよう勧めた。また、南北の裏面には、尊智が四天王像を描いた。この絵堂は大僧正行慶寺務の間に倒壊した後は、聖霊院の礼堂の東庇に機能を移していた

が、今新たに元の位置に絵堂を建て、興隆の本意を彰すものである。

九品の詩歌については慈円は詩を一括して菅原為長に依頼し、和歌を九人の公卿に依頼したようだ。次章に確認する通り、和歌の詠み手は、入道大相国頼実公（上品上生）、前摂政殿下道家公（上品中生）、権大納言基家（上品下生）、前太政大臣公経公（中品上生）、右大将実氏（中品中生）、正三位家隆（中品下生）、従二位民部卿定家（下品上生）、入道従三位保季（下品中生）、正四位下範宗（下品下生）であった。

また『天王寺旧記』貞応三年二月条には、完成前の絵堂に関わる次のような記事も見られる。

貞応三年十一月廿日、改元元仁、二月七日、松殿大納言殿、並御母儀、倶令参詣当寺給、大蔵卿菅為長卿、並子息両人、又侍従定貫朝臣、諸大夫等同令参詣給、

同月、前摂政殿下御詠、上品中生和歌一首、令寄納当寺聖霊院之絵堂、其余公卿各被詠九品往生和歌、又菅宰相為長卿、令賦四韻唐詩九首給、於是権大納言藤教家卿、被清書九品往生詩歌之色紙形

漢詩作者である菅原為長が、子息を連れて四天王寺に参詣している。慈円との作詩の打合せ、あるいは絵堂再建の進捗を確認しに来たのだろうか。道家（前摂政殿下）が上品中生の和歌を読んで四天王寺の聖霊院絵堂に寄納していることも窺える。

また日時は知られないが、『拾玉集』巻第五所収の慈円が公経に中品上生の一首を依頼して公経が和歌を送り、慈円からの礼状に公経が応えた書簡には次のようにある。(8)

九品愚詠叶御意候返々為悦之至無申限候、相構早々絵堂可拝見候、此御感御詠こそ打置かたく覚候へ御礼をばまもりにし候へく候、抑絵堂罷入事候は可沙汰進之由昨日令申候無御返事不審候恐々謹言

公経

とあり、自身の和歌が慈円の意に叶ったことを喜び、必ず早々に絵堂を拝見するという公経の言葉が見える。またここからは、和歌の勧進は慈円自身で行なっていたことが知られる。

また更に重要な記録の一つに、貞応三年正月に慈円が四天王寺聖霊院に捧げた自筆の願文案である青蓮院所蔵「四天王寺聖霊院願文」（重文）がある。(9)願文後序に起草の経緯に続いて、絵堂の九品往生人について記載される。

此間絵堂事致沙汰、図本躰絵出来了、図裏九品往生之間也、同三月四日所労更発不快之間企上洛

これによれば、慈円が予て患っていた中風の悪化により帰洛する三月四日までには「図本躰絵」は完成していたという。「法然上人行状絵図」の記載に沿えば、尊智の絵画制作は四月まで及んだのであるから、「図本躰絵」が指すのは表面の聖徳太子絵伝だろうか。

また建立の時期ついては、『門葉記』元仁元年四月是月条に「法然上人行状絵図」と同様に四月と記す。

同三年四月、建立天王寺絵堂、更画九品往生人

以上のことを整理すれば、次のようなことが絵堂制作の実際として挙げられるだろうか。

・貞応二年の冬から三年四月にかけて尊智が独筆で絵を描いた（「法然上人行状絵図」）。
・貞応三年二月に道家の上品上生の和歌が四天王寺に納められた

（『四天王寺旧記』）。

・公経の中品上生和歌は絵堂を見ずに詠まれて慈円の元に送られた（『拾玉集』）

・貞応三年三月四日までには、「図本躰絵」が完成していた（「四天王寺聖霊院願文」）。

・絵堂は貞応三年四月に完成した（「法然上人絵行状絵図」及び『門葉記』）

またこれらのことから、尊智による絵の制作と、詩歌の勧進が同時進行であり、判明する限り公経と道家は絵の完成前に和歌を慈円に寄せていることから、ほかも同様の状況だったのではないかと推測できる。四月までには九品の和歌と漢詩が揃い、教家による清書も終え、再建がなったのである。

次に「法然上人行状絵図」詞書に記載の九品往生の詩歌について確認していきたい。

四．九品往生人の詩歌と内容

絵堂に描かれた九品往生人の手がかりとなる「法然上人行状絵図」巻第十五第三段記載の九品の階位、往生人名、往生伝の典拠、漢詩、和歌を確認しながら、典拠となった往生伝の概要を紹介する。〈　〉内には詩歌の作者を記した。なお原文は末尾の【参考資料】を参照されたい。

（一）上品上生　智覚禅師　新修往生伝

〈菅原為長〉

九品蓮台其最上　杭州智覚独当機

詞花永馥神棲賦　宿鳥不驚寂定衣

直詣西方生死断　不経陰府古今稀

炎王常拝画図像　蘇息高僧面見帰

〈入道大相国頼実公（藤原頼実）〉

九のしなかみなきはなのうてなにも

ころものうらにとりやすむらむ

『新修往生伝』巻下

智覚禅師は杭州の人。壮年に官吏の道を捨て、天台智者の巌に住し、九十日間これを行ったところ、衣の中に鳥が巣を営む程であった。法華懺を修して七年が経った頃、禅観中に観音菩薩が示現し口に甘露を注がれ、観音の弁才を得て多くの文章を作った。西方浄土の志により「神棲安養賦」などを残した。持雪寶山院に住し、朝暮に演法を行い、夜には阿弥陀仏を念じた。銭忠懿王に請われ永明に住した。徒衆二千人に上り、昼夜修行に精進し、多くの学者が参問に訪れた。日暮れには別峰に住し念仏を行った。それに従うものが百人にも及んだ。開宝八年（九七五）二月二十六日に至り、晨起に香を焚き、会衆に告げ、結跏趺坐して逝去した。

没後数年、智覚禅師の所居寺に拝する契光という僧があった。契光によれば、先日病により閻魔王庁に至ったが、王のような人物が文籍を閲して「お前はまだ死に当たらない。早く帰るように。人を遣わしてこれを送る。」と言う。契光が殿間を仰ぐと、僧の絵像が掛かっており、王は香を焚き、これを頂拝していた。獄吏に問うと、およそ人の生死でここを経由しない者はない。ただ一人、ここを経

由しない者がいた。それが絵像の智覚禅師である。今既に西方浄土に上品上生した。釈迦の滅度よりこの方、九品の上品上生はまさに二人目であると言う。

（二）上品中生　尼善恵　戒珠集

〈菅原為長〉

賢劫如來放大光　善哉善恵往西方
六旬有限新泉路　三昧無人旧道塲
池上蓮粧生八葉　俗間花色恥余香
眼前兼得仏霊告　九品妙台第二望

〈前摂政殿下道家公（九条道家）〉

ふるさとにのこるはちすはあるしにて
やとるひとよにはなそひらくる

真福寺本『戒珠往生伝』巻中

尼善恵は姓鐘、広州の人。十八歳で出家し、道場にて般舟三昧を修していたところ、大光明に賢劫三仏の相合を見、善恵に語るには、行が清浄であるが故に、必ず上品中生を得ると言い、忽ちに消えた。善恵は他言せず、六十五歳にまた往生の告があり、西を向いて合掌、端坐して遷化した。

（三）上品下生　侍従所監藤原忠季　後拾遺往生伝

〈菅原為長〉

我朝朝請大夫士　二世清祈一念深
勁節先彰同雪竹　善根高挺属雲林
三年十月黄昏涙　上品下生金刹心
夢裏乗蓮西去速　客塵自是不能侵

〈権大納言基家（九条基家）〉

みしゆめのやとをうつゞにさとりきて
きのふの花につゆそひらくる

『後拾遺往生伝』巻上

藤原忠季は、寛治六年（一〇九二）六月十三日に六角堂に詣で二世を祈ったところ、夢にある人が現れ、忠季の生処は上品上生（ママ）であると告げた。夢から覚めたのち、所持していた法華経第八巻にこの事に記した。雲林院内に一堂を建て、来迎像を模してその終焉の儀を行なっていた。ますます頂法寺を敬い、専ら極楽を祈念した。また六人の僧徒に毎日転読をさせ六年が過ぎ二千部に満ちた。

天永二年（一一一一）、頭中将通季の牛童の夢で、金人五輩が西方より来て告げて曰く、忠季の迎えだという。その後、端坐念仏して黄昏時に至って遷化した。他に、中宮侍女、彼の孫娘、嫡男、中宮侍女らが、忠季の往生に関連した夢を見た。

（四）中品上生　太原沙弥　戒珠集

〈菅原為長〉

大原貧侶臨河畔　欲画弥陀功独遅
尊像未成沙暖処　浮生易滅雨来時
夜夢縦告出離道　老涙不堪憶子悲

中品上生今所示　至于旧友各相思

〈前太政大臣公経公（西園寺公経）〉
ゆふたちにみつもまさこの河なみや
はちすのなかのうへのしらつゆ

真福寺本『戒珠往生伝』巻下
并州の大原の沙弥は姓名不詳。浄土を欣求し、自ら阿弥陀像を描こうとしたが、絵絹を得られなかったため、河原の砂に指で描いた。二日で三百体を描くことができると、そのことを同友に語り、三日目は、二、三の友と共に描いた。その時忽ち暴雨になり、同伴の者は皆去ったが、沙弥は図像を描き終えていなかったために、洪水の暴流に飲まれ溺死してしまった。父母はこれを聞き一ヶ月あまり泣き暮れたが、夢告があり、砂に阿弥陀を描いた行いにより沙弥は中品上生の往生浄土ができたと言う。

（五）中品中生　小将藤原義孝　保胤往生伝　有夢告

〈菅原為長〉
天延之比無常理　子葉落風槐体家
故薨露消空暗涙　荒原煙尽只春霞
羽林昔有双棲鳥　夢路今攀一詠花
極楽界中詩上趣　品生所指足相加

〈右大将実氏（西園寺実氏）〉
しのはすよなにふるさとのむめかゞも
かさなる中のはなのやとりに

『日本往生極楽記』
右近衛小将藤原義孝は、藤原伊尹の第四子である。深く仏法に帰依し、勤王の間も法華経を誦していた。天延年秋に疱瘡にかかり逝去した。命終の間、法華経の方便品を誦した。
友人の藤高遠は、義孝の卒後程なく、夢裏に義孝とあたかも平生のように相伴して、詩を詠じた。
シカハカリチキリシモノヲワタリカハカヘルホトニハカヘスヘシヤハ
昔契蓬莱宮裏月　今遊極楽界中風

（六）中品下生　沙弥智縁　戒珠伝

〈菅原為長〉
昔在人間雖放逸　帰真年積智縁功
鬢花落飾罷秋鶴　羽猟発心礼世雄
昼夜三時三品観　桑楡一暮一期終
九蓮第六託生趣　述尽向西結大夢

〈正三位家隆（藤原家隆）〉
すてやらて子をおもふしかのしるへより
かりのやまちはいとひいてにき

真福寺本『戒珠往生伝』巻中
沙門智縁は、雁門の人。酒や狩猟を好んだ。鹿を追って山に入る

と、親鹿が子を庇い、矢を恐れないのを見て発心、出家する。師より観無量寿経の教えを受け、九品往生浄土想を心に崇め、昼夜各三時に三品生観をなし三十余年、夢中に九品往生見る。六十七歳で諸親友に別を告げ、中品下生に往生する旨の詩を詠み、西向かって入滅した。

（七）下品上生　釈法敬　戒珠伝

〈菅原為長〉

当初法敬有遺約　身後不忘霊告専
音楽聞天遷化暁　光明入夢十三年
善哉一子出家力　遂是双親得道縁
昔寺維那修善積　宜昇下品上生蓮

〈従二位民部卿定家（藤原定家）〉

たちかへるゆめのただちにをしへをく
うてなのはなのすえのうはつゆ

真福寺本『戒珠往生伝』巻上

釈法敬は、いずれの人かは不明。童子寺に投宿中、釈迦の霊像に降霊祈請し三年が経ち、夢に像が出現して、法敬の浄土往生を告げた。夢が覚めた後、浄土寺に移り、今度は空中に音を聞いた。法敬が願うところを全て叶えさせ、浄土に生まれると告げた。これを寺の維那に伝え、法敬は西に向かい合掌して入滅した。

卒後十三年、維那が光明を帯びた法敬を見る。父母・師・梵行者を救済し、また維那に寿命が尽きるのを知らせるために来たという。維那のような料理を行う僧は罪に触れるため、七日懺悔念仏し、衣鉢を捨て、三宝の絵で償い、その像を前に阿弥陀の本願に専念すれば下品上生を得られると言う。維那は目覚めた後、霊告の通り実行し七日後逝去した。

（八）下品中生　覚真阿闍梨　続本朝往生伝

〈菅原為長〉

尋鞍馬寺久棲遅　祈請炎王有所思
陽茂闍梨従入夢　西方覚藥不生疑
九生蓮位上中下　万部花文読誦持
以第八門当此品　来縁定熟命終時

〈入道従三位保季（藤原保季）〉

をしへいるるみちはかすかのさとの月
さとれはゞるのひかりなりけり

『続本朝往生伝』

阿闍梨覚真は、もと延暦寺の無動寺の浄侶であった。初めは洛陽に出でて、公請の用を勤め、後には菩提心を発して、鞍馬寺の西谷に隠棲した。師匠の康範僧正は世間の師により、老後に阿闍梨に補任された。昔閻魔天を百箇日供養し、命期、生処、死期、また貧道を免かれるか否かを知りたいと祈願した。夢告により、下品中生を得ることを知る。その後三十余年、毎日に法華を誦し、その数既に万余部に及んだ。臨終の時には法華経を誦して、西に向かって入滅した。

（九）下品下生　釈恵進　新修往生伝

〈菅原為長〉

釈恵進貧無所蓄　檀施之物誰応侵
欲飛鵝眼空労眼　不憶梟心還有心
百部花文今已満　八旬楡景遂西沈
善哉下品下生位　従在世間素意深

〈正四位下範宗朝臣（藤原範宗）〉

こゝのしなねかふはちすのすゑのいとを
みたさてかへるよるのしらなみ

『新修往生伝』巻上

釈恵進は鳥陳の人。四十歳の時身の夢幻を覚え、揚州の高座寺にて出家する。中年での出家のため、円頓の蹟を極められなかった。法華経誦持の願によって、残報を畢らせようとするも発病し、百部造経を発願し、銭一千六百を集めた。ある夕、群賊が来寇したが恵進は恐れる様子なく合掌して銭を指し、これは経のための銭であり、檀越の家より寄進されたものと告げる。賊はこれを聞き慚愧して去った。この後百部が成り、病が進んだ折、突如空中に声を聞く。恵進の願いは遂げられ、浄土に生まれることができると言う。恵進はこれを聞き、もとより上品を願わず下品下生を願うと言った。永明三年八十歳にて逝去した。

以上が「法然上人行状絵図」の詞書に記録された、九品往生人の詩歌と往生伝の内容である。今、一つ一つの詩歌についての詳述は控えるが、漢詩、和歌ともに、おおよそ往生伝の内容を踏まえて詠まれていると判断できる。詩歌の作者には、選ばれた往生伝の内容について伝えられていたのだろう。では、慈円はなぜこれらの往生伝を選んだのだろうか。

五．九品往生伝の選定

これらの往生伝が選ばれた理由の一つには、そもそも九品の階位を示す往生伝が少ないことが選択の幅を圧倒的に狭めたことが要因としてあるかもしれない。それでもなおこれらが選び出された積極的な意味について順に振り返りながら一考してみたい。

上品上生の智覚禅師は、観音の霊告により弁才を伝授され、著作多数を残す。法華懺など修して、閻魔王庁の裁きを経由せず、上品上生を遂げる。

智覚禅師、すなわち永明延寿（九〇四～九七五）は、五代から北宋初に活動した人物である。法眼文益の法嗣、天台徳韶の弟子であり、法眼宗第三祖として知られ、中唐以来の教禅一致思想を大成者と位置付けられる。現在では、禅宗の祖師として認識されることが多いが、日本の院政期には、閻魔王庁を経由せずに上品上生を遂げた浄土教者として、浄土教関係資料に登場することが伊藤茂樹氏により指摘されている。(10)

伊藤氏によれば、智覚禅師の伝記を収録する中国の典拠は『宋高僧伝』（九八八）、『景徳伝灯録』（一〇〇四）、『新修往生伝』（一〇八四）、『龍舒浄土文』（一一六〇）、『楽邦文類』（一二〇〇）などがあるが、上品上生の伝承がはじめて見られるのは『新修往生伝』であるという。

日本に至り、東大寺東南院の珍海撰『菩提心集』（大治三年、一一二八）には、『新修往生伝』に基づく智覚禅師の上品上生伝承が引用されている。また、天台僧の澄憲、聖覚父子の安居院流の唱導資料である『言泉集』（嘉禎元年、一二三五年までに成立）にも「不遇炎魔王直往生人唯一人事」として記載されるなど、釈迦以来上品上生を果たした唯一の人物として、認識されていた。また「法然上人行状絵図」巻第二十四には、「達磨宗の祖師智覚禅師は上品上生の人なり」とあり、その認識は浄土門にも継承される。(11)

慈円が上品上生に智覚禅師を据えたのはそうした院政期の認識を引き継ぐためである。伝記では天台山に法華懺を行修しているように、天台的修行であることも、慈円の希望に適っただろう。

なおおそらく十世紀半ばの成立とされる智覚禅師の「神棲安養賦」一巻は禅浄一致の立場から、自らの信仰体験を綴ったもので、浄土三部経などの用語を用い、さらに諸々の往生集を引用して、西方浄土の荘厳、阿弥陀仏の不可思議を讃歎している。同じく宋代に成立した要文集『楽邦文類』巻第五に収録され伝わっている。

後に述べるように、慈円は和歌による祈りこそが神仏に祈りを捧げる優れた手段であると考えていた。「神棲安養賦」は、阿弥陀仏への祈りの賦であり、慈円はそのような歌による祈りのあり方に共感する部分もあったのではないだろうか。

上品中生の尼善恵は、般舟三昧を修していたところに、賢劫三仏による上品中生の霊告あり、後年に往生する。「法然上人行状絵図」で「戒珠集」あるいは「戒珠伝」と記される真福寺本『戒珠往生伝』は、名古屋市の真福寺に残る往生伝である。(12) 塚本善隆氏によれば、十三世紀の仏教界で極めて流行した形跡があるという。本書は十一世紀末に日本に齎された遼僧・非濁撰述の『新編随願往生集』（佚書）二十巻から、浄土信仰に関わる往生伝のみが十二世紀後半頃に抄出されたものである。遼僧の撰述であることを憚ってか、当時名は知られていたが実際には流通していなかった宋僧・戒珠撰『浄土往生伝』（一〇六四）の名を借りて世に出された。

また同氏によれば『新編随願往生集』や真福寺本『戒珠往生伝』は法然や貞慶、宗性などにも利用された跡があるという。さらに絵画では貞応二年（一二二三）建立の醍醐寺焔魔王堂（現存せず）、十三世紀制作の極楽寺所蔵「六道絵」（重文）、十四世紀制作の金戒光明寺所蔵「地獄極楽図屏風」（重文）などに典拠として使用が認められる。(13) 慈円がここにおいて上品中生、中品上生、中品下生、下品下生の四つに真福寺本『戒珠往生伝』を利用したのは、同時代の仏教界において信頼された往生伝であったためと思われる。

上品下生の藤原忠季（?～一一九六）は、六角堂に詣でて祈念したところ、夢にある人の霊告あり、上品上（ママ）を告げられる。その後極楽を祈念し、遷化した。慈円はこの往生伝を上品下生に当てている。六角堂はこの時既に延暦寺の末寺であった。聖徳太子信仰の一拠点であり、夢に登場したある人に、聖徳太子を解釈した可能性もあろうか。

中品上生の大原沙弥は河原に阿弥陀仏を描いていたところ、増水から逃げ遅れ溺死する。後日父母に沙弥より中品上生を遂げたとの夢告あり。真福寺本『戒珠往生伝』所収の往生伝である。

中品中生の藤原義孝（九五四～七四）は平時に法華経を誦し、後に疱瘡にかかり逝去する。後日友人の藤原高遠に義孝の夢告があり、義孝は往生極楽したとの漢詩を詠む。この往生伝の内容中には階位

が記されない。しかし「法然上人行状絵図」には、この義孝の名の下部に「有夢告」と書かれており、階位はないものの、後述の如く霊告エピソードがある故に選ばれたと思われる。

なお『愚管抄』巻第四では、義孝について「義孝少将ノ子ナリ。和漢ノ才ニミナヒデデ。ソノ外ノ能芸トリドリニ人ニ勝レタリ。」とあり、藤原伊尹（九二四～七二）の息子であり、和漢の詩歌に優れると記載される。義孝の詩歌の才能はよく知られたところのようで、天延二年（九七四）に病で亡くなった後に、人の夢に現れて詩歌を詠んだ説話が『江談抄』や『今昔物語集』などに伝えられる。詩歌の才能を有する点もまた、智覚禅師同様に選定の一要因となっただろう。

中品下生の沙門智縁は狩猟を好んだが発心し、『観無量寿経』の教之を受け、九品往生を願いその夢を見る。六十七歳で友に別れを告げ、中品下生に往生するという旨の詩を詠み遷化する。これも真福寺本『戒珠往生伝』所収の往生伝である。

下品上生の釈法敬は釈迦の霊像に降霊祈請し、自身の往生の夢告を受け遷化する。十三年後、同寺の維那に法敬の霊告あり。懺悔念仏し、衣鉢を捨て、三宝の絵で償い、その像を前に阿弥陀の本願に専念すれば、下品上生を得られるという。維那は霊告通りにし往生する。真福寺本『戒珠往生伝』所収の往生伝である。

下品中生の阿闍梨覚真は、鞍馬寺に住し、もと無動寺の僧であった。閻魔天を百箇日供養し下品中生の夢告を得る。臨終には法華経を誦して入滅した。当時鞍馬寺も無動寺も青蓮院門跡の付属の寺であり、慈円は無動寺執印にも補任されている。この場合、青蓮院ゆかりの寺僧であることが選定の決め手だったのではなかろうか。

下品下生の釈恵進は百部の造経を成し、空中より往生浄土の霊告あり声を聞く。恵進は浄土に生まれることができると言う。恵進はこれを聞き下品下生を願うと言い、八十歳にて逝去した。後述のように、「四天王寺聖霊院願文」の中で慈円が八十歳までの長生を願っていることと関連して選ばれた可能性がある。

以上の九品の往生伝は、明らかに天台的な浄土信仰を示すものが選び取られている。前述のように、絵堂色紙形にあった慈円の銘文「殊勧進一乗浄土之業」とも合致するものである。

しかし一方で、九品の往生伝に共通する性格として注目したいのは、いずれも霊告（夢告）が現れることである。霊告のエピソードを持つ往生伝は多く、偶然に集まったとする見方もあるかもしれない。しかし筆者は慈円晩年の思想動向から、むしろ霊告エピソードを必須条件として集められたと考える。

六．慈円晩年の霊告をめぐる動向

多賀宗隼氏の論考を頼りに、慈円晩年に顕著になる霊告について述べておきたい[14]。

建久三年（一一九二）、天台座主、権僧正として護持僧に任じられて以来、慈円は後鳥羽院のための祈祷を勤めてきた。それが建保三年（一二一五）、政治体制をめぐっての意見の相違や九条家の青蓮院門跡と近衛家の梶井門跡間の対立で後鳥羽院が梶井に傾いていったことなどから、慈円は院の下を退く。承久元年（一二一九）を最後に、以後院ための祈祷を行っていない。この前後から院のための祈祷と交代するようにして、九条家に対する祈りが増え、神仏の霊告が顕著になってくる（〈霊告・四天王寺聖霊院絵堂関連年

表〉参照）。[15]

公武衝突の危機の中にあって、朝廷と公卿政治、特に九条家の破滅を防ごうとする慈円は、神鑑・冥助を以てこの困難に対処し、未来の見通しと確信とを得ようとした。そのような希求から慈円が神仏から受けた霊告は、今に伝わる願文などにその内容を留めている。

特に建保四年（一二一六）正月に受けた聖徳太子の霊告は、その後の慈円にとって大きな意味を持った。

この霊告の内容は、貞応三年正月二十二日から二十九日まで慈円が四天王寺聖霊院に参籠した際に、起草し聖徳太子の霊前で読んだ「四天王寺聖霊院願文」に窺える。この貞応三年正月願文には、建保四年の霊告の内容、その実現と承久の乱後の瓦解、本願文起草に至るまでの経緯、そして前述の通り後序には再建中の絵堂について窺うことができる。[16]病の体を推してまで四天王寺に参詣し七日間の参籠を行う、切実な思いがそこには述べられる。

「四天王寺聖霊院願文」は冒頭の「謹敬白聖徳太子（十禅師権現）而言、冥顕隔境、凡意易迷、唯以夢知未来、従古存先規」に続いて、建保四年に受けた霊告について述懐を始める。それによると、霊告は夢の中で聖徳太子より山王の新宮の御躰と、漢字で表記された和歌が書かれた札とを賜るというものであり、その文字は「興隆仏法王法之象」つまり仏法王法を興隆すべき姿を表していたという。それはやがて到来する九条家の隆盛の予言でもあった。

願文では、実際その後数年、九条家は再興に向けて順風満帆の時代を過ごしたことを述べる。源実朝の暗殺を契機とした九条頼経（道家の三男）の関東下向、順徳天皇の女御立子（良経の娘）の皇子誕生（懐成皇子）、懐成皇子の即位（仲恭天皇）、外舅となった道家の執政など、慈円の眼前で霊告は次々と現実のものとなっていったのである。慈円はその後も度々霊告を受け信頼を寄せていたが、承久の乱後、三上皇遠流、五卿梟首という悲境、そして在位期間わずか八十日での仲恭天皇の廃位、摂政道家の失脚などにより、霊告への不信に陥ったと述べる。

しかし思い直し、霊告の示すところが実現するかどうかを神意に問うために山王に参拝すると再び霊告を得た。それによると仲恭天皇の復位、配流された後鳥羽院の帰洛、摂政道家の還補、頼経の将軍就任と無事の成人などいずれもが実現しそうな気配であった。これらのことは皆神仏の告げるものであり、それが人民のためとなるのであり、山王の納受するところ、太子の冥助するところであるとされ、慈円は一度裏切られた霊告へ再度信頼を寄せることを願文で誓うのである。慈円はこの霊告の実現を期待し、さらに新たな霊告を受けることを願っている。

そして慈円が願文の最後において端的に示した願いは、公武合体の明るい兆しを告げる霊告の再来（吾太子聖霊、照見仏子懇念、重欲請夢告）、霊告の実現を見届けるため八十歳までの長命（老身之告者期八旬）、また無病にて臨終正念（無病頓取死往正念、後生必離三悪）することの大きく三点に集約できると思われる。

この貞応三年正月の願文が示すように、慈円は晩年に度々霊告を受け、その実現に心を砕くようになっていた。九品往生伝はそのような精神下で選択されたのであり、よって、筆者は霊告という観点から往生伝の選定が行われたと考える。

七．霊告と菅原為長

霊告という観点から、九品総ての漢詩を一任された菅原為長（一一五八～一二六四）に注目したい。為長は儒学者、文章博士、大蔵卿であり土、御門天皇以来、順徳・後堀河・四条・後嵯峨天の五代の侍読を勤仕した。菅原氏が公卿に列せられたのは道真以来であった。また九条家の近臣でもあった。

慈円と為長の霊告をめぐる出来事が『拾玉集』巻第四に見出せる。建保六年（一二一八）二月頃、四天王寺の律師空印が、慈円の命で聖霊に歌を詠みあげていたところ霊夢を受けた。霊夢は四天王寺御前の海水が上昇し、空印の身を浸すというものだった。慈円はこの霊夢を為長に夢合わせさせ、為長はこれを吉事が重ねて起きるお告げであろうと診断した。その後、同年十月には女御立子が皇子を出産し、霊告の通り吉事が起きたのである。

為長が慈円に関わる夢合わせをしたという記事を、筆者はこのほかに見つけ得てないない。しかし慈円の死後の動きではあるが、『平戸記』記載の夢の記事に為長が関わっている場合が多く、延応二年（一二四〇）正月十九日には為長自身が北野社に参籠した際の夢想の事を道家に報告している[17]。為長は慈円の死後も九条家と霊告を通じての交流をしているのである。

また『本朝文集』巻第六十六所収の為長による「舎利報恩記」及び「逆修功徳願文」には、慈円の為人が記される。特に後者では「吉水前大僧正者、知人之心、過人之故、重我異他、于朝、于夕、恋之慕之」と述べており、慈円を慕う為長の姿を想わせる。慈円と為長が心友であることは、よく知られることである

このことから筆者は、建保六年の霊告の診断に限らず、為長は霊告をめぐって慈円と関わりを持ち続けたのではないかと想像する。

九品往生人の漢詩が為長に一任されたのは、おそらく空印律師が受けた霊告を為長が九条家の顕栄を示す吉事と判じ、少なくとも承久の乱以前まではそれが実現した実績があったことに加え、また平生に慈円と交流があり、の霊告をめぐる信仰に深く関与していたからではなかろうか。

為長は慈円の意向を汲んで、九つ中七つ（上品上生と下品下生以外）の階位に「霊告」や「夢」を織り込んだ詩を詠んだのである。では「霊告」や「夢」を入れない、上品上生と下品下生にはいかなる願いが込められていたであろうか。漢詩が慈円の願望を代弁するものであるとすれば、上品上生の漢詩は、上品上生を願うもの（九品蓮台其最上）であると同時に、九品の漢詩や和歌に詠まれた願いが叶うこと（詞花永馥）と解釈できようか。

下品下生の漢詩は、霊告の実現を目の当たりにするため八十歳までの長生を期待する（八旬楡景遂西沈）ものであったろう。

霊告の実現・再来、上品上生、八十歳までの長命という願いは、「四天王寺聖霊院願文」の内容とも齟齬しない。前述の通り、「四天王寺聖霊院願文」の後序には、絵堂の沙汰の記述もある。「四天王寺聖霊院願文」は絵堂の再興に際して慈円が願うところが記されたものと見做すこともできようか。

とすればやはり慈円は従来言われるように、絵堂の再興によって我が身や九条家の後世のみを祈ったのではない。慈円の公武一体による天下の静謐の願いは揺らぐことなく、絵堂の再興事業にも貫かれているのである。

では次に九つの和歌について、慈円の願いとどのように関わるのかを考えてみたい。

八．和歌と詠者

慈円はなぜ和歌を勧進したのであろうか。九品往生の図に『観経』を主題とした漢詩を賦することはあっても、和歌を賦するのは珍しい。そこには、歌人としても活躍した、慈円の和歌観が表れていると思われる。

神仏との和歌による交感はこの時代の通念であり、当代有数の歌人であった慈円にはとりわけ顕著である。[18] 例えば慈円は和歌を介して聖徳太子の霊告を受け（建保四年正月霊告）、そして祈りを捧げ（同七年正月難波百首）ている。

また『拾玉集』巻第四の難波百首についての記録には、慈円の和歌観がよく表れている。

> 吾が国の風俗、理にもやとて、正月一日は縁ある日なれば、その日より四日までに詠み果てて、百歌一巻を書きて奉り給へと中宮大夫の家に誂へ申し侍るなり
>
> （我が国の風俗である和歌により祈願することも、道理のあることであろうかと思って、正月一日は縁のある日（聖徳太子の誕生日）なので、その日から四日までに詠み終えて、百首一巻を清書してご献上くださいと中宮大夫九条教家に依頼申しましたのです。）[19]。

慈円にとり、和歌は太子との交感のための媒介であったのである。興味深いことに、その交感を自分以外の九人に任せている。九人の詠者の人選については、筆者はまだ詳記する知識を持ち合わせていないため、簡単に触れてまとめておきたい。[20]

上品上生の藤原頼実（一一五五～一二二五）は、目立つ歌人ではなく、この時点では出家していた。多賀氏は当時の政界の先輩、長老として敬意を表したかとしている。

また頼実について、慈光寺本『承久記』によれば、「哀レ君ハ悪ク御計アル者哉」と後鳥羽院の倒幕の無謀を嘆いたとされる。想像に過ぎないが、後鳥羽院の倒幕に批判的であったという点で、慈円と心通わせるところがあったのだろうか。

上品中生の九条道家は当時九条家の当主であり、承久三年四月摂政であったが、承久の乱に仲恭天皇遜位と共に、その地位を去っていた。九条家の執政を理想とする慈円はその復位を入滅に至るまで熱願し続けた。

上品下生の権大納言基家については、多賀氏は持明院基家とするが、持明院基家は建保二年（一二一四）に没しているので、ここでは道家の異母弟である九条基家（一二〇三～八〇）と考えた方が良いだろう。

中品上生の西園寺公経（一一七一～一二四四）は承久以前から慈円と極めて親しい関係にあり、慈円は信頼を寄せている。貞応元年の大懺法院再興の際には、わざわざ公経のための祈りを定めその堂を開いている程である。承久の乱後には武家政権と手を組み、圧倒的な権威を振るった。九条家とは姻戚関係にあり、道家の舅であり、関東将軍頼経の祖父である。

中品中生の西園寺実氏（一一九四～一二六九）は、公経の息子である。慈円は早くにその才能を認めて『愚管抄』巻第六に「詩ツクリ歌ヨミメテタキ」人物として讃えている。

中品下生の藤原家隆（一一五八～一二三七）は定家と並び称される歌人であり、定家の父・俊成の門下である。晩年、四天王寺で日想観を行いその地で没している。

下品上生の藤原定家（一一六二～一二四一）は二十五歳の春頃から、九条家の家人となり、慈円、良経らと親しんでいる。慈円、家隆とともに『新古今和歌集』の和歌所に選ばれている。

下品中生の藤原保季（一一七一～?）は建仁元年（一二〇一）の通親亭影供歌合で慈円、家隆、定家と、元久元年（一二〇四）の春日社歌合では、慈円、公経、家隆、定家、元久二年の元久詩歌合では、慈円、家隆、定家、為長とともに参加している。

下品下生の藤原範宗（一一七一～一二二三）は、順徳院歌壇に活躍した。建保二年八月十六日歌合で定家、家隆と同席している。保季と範宗は慈円とも歌合を通じた交流を確認でき、和歌の才を認められて詠歌を依頼されたのだろうか。

そして絵堂に賦す詩歌の清書は、良経の次男、道家の同母弟である九条教家（一一九四～一二五五）に任された。建保七年（一二一九）正月に慈円が聖徳太子からの霊告を受けて詠んだ難波百首を四天王寺聖霊院に奉納する際に清書した人物である。

和歌の詠者には九条家の人物、あるいは西園寺父子のようにゆかりのある人物、そして定家ら才ある歌人が選ばれた。この人選からは、慈円が和歌を勧進した意図が二つ推測できる。

第一は、聖徳太子絵伝裏面の九品往生人図に和歌を賦すことで、九人の往生人及び救世観音たる聖徳太子に結縁し、詠者と再建発願者たる慈円本人の往生浄土、そして「法然上人行状絵図」記載の銘文が伝えるような、一乗浄土の業の弘通を願ったと思われる。その願いを太子へ捧げるために、九条家及び定家をはじめとした優れた歌人が選び出されているのだろう。

『聖徳太子伝暦』などに見る、聖徳太子が救世観音化身であるとする信仰、また『四天王寺縁起』により説かれる四天王寺の西門が極楽浄土の東門に当たるという、四天王寺独自の浄土信仰を前提にしたものである。

また、多賀氏により指摘されるように、この人選が貞応元年の「大懺法院再興願文」に述べられる祈願の対象と重なることも見過ごせない。「大懺法院再興願文」は慈円が承久の乱後、貞応元年四月にかつて後鳥羽院が最勝四天王院を建てた三条白河の地が青蓮院に返付され、そこに大懺法院を再興した際の願文である。この「大懺法院再興願文」の願うところは、九条家出身の関東将軍頼経、その父道家の佳運、将軍の祖父である西園寺公経の悉地、天下の静謐が核心である[21]。

「大懺法院再興願文」の核心は「四天王寺聖霊院願文」の核心とも重なり、ここに慈円晩年の祈りがやはり一貫して幕府、九条家を中心とした摂関家、そしてその先に叶う国の安寧にあったことがうかがえるのである。

この類似から九条家及びゆかりの人物を中心とした詠者の選定の背後には、公武の兼行を祈願する思惑が強く働いていると考えられる。このことから、慈円は和歌を勧進することで、やはり公卿らと霊告の証人たる九往生人及び聖徳太子の縁を結び、往生伝と漢詩に込めた太子の霊告の実現と再来、それにより導かれる公武一体の慈円の祈りに彼らを参画させているのだと思われる。これが第二の意図である。

九．むすび

以上のことを簡単にまとめてむすびとしたい。

従来言われるように、貞応三年に絵堂を再建し聖徳太子絵伝と九品往生人図を表裏に描くことで、慈円が自身と九条家の浄土往生、後世の安泰を聖徳太子に願ったというのは疑いようのない事実である。しかしそれは一面に過ぎない。

描かれた九品の往生伝は、全て霊告のエピソードを有するものであった。霊告は、慈円晩年の信仰上で最も重要な要素として、承久元年、後鳥羽院から離れた頃から、その信仰のうちに多く見出されるようになる。絵堂再建中の貞応三年正月、聖霊院に捧げられた「四天王寺聖霊院願文」では建保四年の霊告を呼び起こし、国家の行く末を案じて、聖徳太子の霊告の実現と再来を願っている。余命幾らもないと悟った慈円の切実な願いがつづられている。そうした状況から、この絵堂に描かれた往生伝は霊告エピソードの有無もその選定の基準となっていたと考える。

これらの往生伝と合わせ、昵懇の菅原為長による「霊告」や「夢」を織り込んだ詩を賦すことで、慈円は絵堂の再興に聖徳太子からの霊告の実現と再来、そして霊告を目の当たりにするための長生と臨終正念による上品上生を祈願しているのである。

そして九品の和歌は九条家、九条家ゆかりの人物、そして優れた歌人により詠われていた。慈円は和歌を勧進し、公卿らを画中の九品往生人と聖徳太子とに結縁させることで、彼ら自身と発願者慈円の往生浄土、一乗浄土業の弘通を祈願していると思われる。また同時に、慈円の祈願の核心である聖徳太子への九条家を中心とした公武一体実現の祈りに彼らを参画させていると考えられるのである。

註

1 川岸宏教氏の論考に従い、絵堂が天徳四年（九六〇）に焼失したと考えれば、現在の杉本健吉の絵を伴う絵堂は七代目と考えられる。川岸宏教「四天王寺絵堂と障子絵伝」『四天王寺女子大学紀要』第十二号、一九七九年

2 四天王寺聖霊院絵堂の九品往生人に関する論考は次の通り参照した。高瀬承厳「四天王寺絵堂の九品往生の歌詩」『大正大学々報』第一号、一九二七年。岸信宏「慈鎮和尚四天王寺絵堂九品往生図の研究」『四天王寺』第八巻第十号、一九四二年。川岸宏教前掲注1。多賀宗隼『慈円の研究』吉川弘文館、一九八〇年。大原嘉豊 博士論文「日本九品来迎図研究」二〇〇〇年、尾崎勇「愚管抄と四天王寺の聖霊院絵堂の再建」『日本仏教綜合研究』第四号、二〇〇五年。

3 多賀宗隼前掲注2著作

4 多賀宗隼「史料紹介　青蓮院本を中心として」『史学雑誌』第六七号（四）、一九五八年

5 谷知子氏によれば、慈円の法楽和歌に関する最も早い記録である『玉葉』寿永二年（一一八三）二月二十二日の記事に、法橋観性の勧進によって慈円が開いた報恩講において詩歌を詠んだとあり、この報恩講を聖徳太子の命日にちなむものだったとする。慈円の太子信仰は最晩年に顕著になるが、それ以前からあったと考えられる。谷知子「九条家の舎利講と和歌」『中世文学』第三十七号、一九九二年

6 川岸宏教「聖徳太子讃仰の文学・芸術」日本仏教学会編『仏教と文学・芸術』平楽寺書店、一九七三年

7 川岸前掲注1

8 多賀宗隼編『慈円全集』七丈書院、一九四六年

9 赤松俊秀「愚管抄について」『鎌倉仏教の研究』平楽寺書店、一九五七年

10 伊藤茂樹氏によれば『新修往生伝』は一〇八四年に成立し、一一〇一年に開版された後、二十～三十年のうちに日本に渡ったことが国会図書館蔵本に大治三年（一一二八）の年紀あることから推測される。伊藤茂樹「南都浄土教と永明延寿」『印度学仏教学研究』第六十六巻第二号、二〇一八年

11 森江氏によれば、元文元年（一二二四）頃の成立とされる親鸞の著作『教行信証』巻第三において「禅宗智覚讃念仏行者云。奇哉。仏力難思。古今未有。」として、『楽邦文類』巻第五所収「神棲安養賦」に依拠して、智覚が念仏行者を賛嘆したとする。よって遅くともこの頃までには「神棲安養賦」の内容も日本で知られていたと考えられる。森江俊孝「日本の禅と浄土教に及ぼせる永明延寿の影響」『日本仏教学会年報』第四十二号、一九七六年

12 塚本善隆「日本に遺存せる遼文学とその影響」『東方学報』京都第第七冊、一九三六年（再録『塚本善隆著作集』第六巻、大東出版社、一九七四年）

13 阿部美香「堕地獄と蘇生譚－醍醐寺焔魔王堂絵銘を読む」『説話文学研究』第四十号、二〇〇五年。拙稿「金戒光明寺蔵「地獄極楽図屏風」再考」『美術史』第一八一号、二〇一六年。拙稿「兵庫・極楽寺「六道絵」の説話図像」『佐野みどり古希記念論集』青簡舎、二〇二一年

14 多賀宗隼前掲注2著作。

15 慈円霊告関連年表作成のため、次の論考を参照した。赤松前掲注9論文、多賀前掲注2著作、慈円和歌研究会著『慈円難波百首全釈』風間書房、二〇〇九年

16 赤松前掲注9論文に全文が掲載される。

17 松薗斉「中世の幼帝について」『紫苑』第十四号、二〇一六年

18 山本一「「難波百首」と慈円の和歌観―中世的和歌観の一様」『金沢大学教育学部紀要』第三十六巻、一九八七年

19 和歌の詠者は一考したようで、陽明文庫所蔵「慈円消息・九品歌事」書状には、案段階の人選が記されている。書状やり取りの相手は知られないが、川岸氏は定家であろうかとする。書状には上品上生から順に相国禅門（頼実）、前相国（公経）、新大納言（基家）、右大将（実氏）、御分（不明）、家隆卿（家隆）、保季入道（保季）、高倉殿（不明）、故禅門女（不明）の名が挙げられる。

20 多賀前掲注8

21 語釈は前掲注15『慈円難波百首全釈』による。また多賀氏によれば『拾玉集』巻第五には、和語と和歌と仏教の三つが三位一体として慈円により論じられているとする。多賀前掲注2著作

【参考資料】

以下に慈円再興絵堂に描かれた九品往生人の典拠となった往生伝を記載する。参照した資料が旧字体で記載されていた場合、新字体に改めず旧字体のまま記した。

（一）上品上生　智覚禅師

〈典拠〉『新修往生伝』巻下（『続浄』第十六巻）

廿七杭州惠日永明寺智覺禪師延壽。餘杭人。姓王氏。總角之歲。六旬之內。誦法華經全袟。既冠不茹葷。日惟一食。長爲縣衙校。壯年慕道。棄吏業。投翠巖禪師出家。衣不縕纊。食不重味。爾後參見韶國師。授以心法。初住天台智者巖。九旬習定。有烏巢衣褁中。修法華懺經七年。禪觀中見觀音菩薩。親以甘露灌于口。遂獲觀音辨才。下筆成文。盈卷乃已。志求西方淨土。著神棲安養賦。證驗賦。萬善同歸集。宗鏡錄共數百卷。住持雪竇山院。朝暮演法。夜則念阿彌陀佛。行道發願。日課一百八事。未嘗廢輟。錢忠懿王。請住永明。徒衆二千。晝夜修持愈精進。學者參問。則壁立千仞。指心爲宗。以悟爲訣。日暮往別峯。行道念佛。自爲難繼。不欲强衆。然密相隨者。常及百人。夜靜四旁行人。聞山中螺唄〔考〕唄字一本作貝天樂之聲。伺求之。見師於山腹中平夷處。旋繞行道。忠懿王歎曰。自古求西方者。未有如此之專功也。遂開山立西方香嚴殿。以成師之志如是。住永明十五年。度弟子一千七百人。常與七衆授菩薩戒。夜施鬼神食。晝放生命。不計其數。皆廻向淨土。至開寶八年二月二十六日。晨起焚香。告衆加趺而逝。沒後數年。有僧結囊。訪師所居寺。幷眞塔之所在。勤奉瞻禮。數日不已。問之答曰。某名契光。撫州人也。素不知師名。昨因疾死至陰府。見所司殿宇。若王者居。閱文籍曰。汝未當死。速返。遣人護送之。仰觀殿間。掛畫僧像。王焚香頂拜。乃問獄吏。此何人。王奉之勤。吏曰。凡人之生死。無不由此者。唯此一人。不經于此。王欲識之。乃畫其像。是杭州永明寺壽禪師也。今已西方九品上生矣。自釋迦滅度已來。此方九品上上生。方第二人。〔考〕人下一本有王所以三字奉レ之之勤耳。某既得生晝夜思想聖人眞身塔骨之難遇。是以不遠千里而來耳。問撫州僧者。法名志全。其人雖已老。今淨慈長老圓照禪師。親見之問之。如所傳云。

（二）上品中生　尼善慧

〈典拠〉真福寺本『戒珠往生伝』巻中（『塚本善隆著作集』第六巻、大東出版社、一九七四年）

尼善恵者。姓鐘氏。広州人也。少康節。既十八。厭世出家。都不食酒肉。蔬食布衣。安般舟三昧道場。自行其法。於道場内。見大光明。従上而下。中有賢劫三仏相好。語善恵曰。為汝罪銷故来影向。汝行清浄。必生浄土上品中生。忽爾不現。恵自謂誑。不語他。葉青蓮華。七日以後零落。香気異人中花矣。

（三）上品下生　藤原忠季

〈典拠〉『後拾遺往生伝』巻上（日本思想体系七巻『往生伝・法華験記』岩波書店、一九七四年）

侍従所監藤原忠季者。本官大府郎中《大蔵□唐名云々》位亦朝請大夫。仕主有直。交衆有信。去寛治六年六月十三日。詣［誦］六角堂。祈二世事。于時夢中有人告白。汝之生処。上品上生也。夢覚後。所持法華経第八巻奥記此事矣。心銘此事。雲林院内建一堂。模其来迎像。方諳終焉之儀。弥戴頂法寺。専欣極楽。又更以六口之僧徒。到毎日転読。送六箇年。満二千部。其後不記部数。天永二年［板本「三」］年十月一日。頭中将通季牛童〈字王童丸〉夢。金人五輩従西方来。告白。我是所監大夫之迎也。以同九日。其人雖非霧峒。聊有風気。十七日辰剋。自起沐浴。端坐念仏。黄昏時至。北首而卒〈生年七十三［板本「二」］〉顔色如眠。衣襟有薫。其翌日午剋。中宮侍女夢。小仏数十。各擎蓮花。在彼人側云々。同日。彼孫女夢。菩薩三人入東戸。問訊其〔人〕。一人執白蓋。一人捧綵幡。一人持蓮花云々。同十九日。嫡男弾正忠々職夢。仏自西方放光。乗師子遥来。又有師子相従而来。仏即税駕而入。両師子留砌下。相伴而舞矣。同時又中宮侍女夢彼人忽成幼童。容色五六歳。髪髪垂（ウナヰ）而可愛。即称此言。乗蓮西去云々。凡自彼死日。経七箇日。顔色無変。身体不爛。迄葬埋時。和風東来。香煙西聳。月色雲膚。倶以奇成。

（四）中品上生　太原沙弥

〈典拠〉真福寺本『戒珠往生伝』巻下（『塚本善隆著作集』第六巻、大東出版社、一九七四年）

并州大原有沙弥。不知姓名。師事衍禅師。師亡後。欣求浄土。自欲画無量寿像。不能得絹帛。即出河側。以指図沙。二日得三百体。還語同友。第三日問。同友両三。共往図之。暴雨忽下。同伴皆去。沙弥図像未了。其身而立。洪水暴流。沙弥即溺死。父母聞之。悲泣一月余。夢告。吾乗図沙善。往生浄土。即在中品上生。願父母親友。修浄土業。早離苦城。耶嬢同友。聞此告。修善業。得浄土迎矣。

（五）中品中生　右近衛小将藤原義孝

〈典拠〉『日本往生極楽記』（日本思想体系七巻『往生伝・法華験記』岩波書店、一九七四年）

右近衛小将藤原義孝。太政大臣贈正一位謙徳公第四子也。深帰仏法。終断葷腥。勤王之間誦法花経。天延年秋病疱瘡卒矣。命終之間。誦方便品。気絶之後異香満室。同府亜将藤高遠。同在禁省。相友善矣。義孝卒後不幾。夢裏相伴宛如平生。便詠一句。

シカハカリチキリシモノヲワタリカハカヘルホトニハカヘスヘシヤハ。

詩云。

昔契蓬莱宮裏月。今遊極楽界中風。

（六）中品下生　沙弥智縁

〈典拠〉真福寺本『戒珠往生伝』巻中（『塚本善隆著作集』第六巻、大東出版社、一九七四年）

沙門智縁者。雁門人。遠公末胤也。初在俗好行酒獦。追鹿入山。見麑子不恐箭。発心出家従師訪道。稟受観無量寿経。心崇九品往生浄土想。昼夜各三時。作三品生観。三十余年。頗有証想。夢中見九品往生。能化所化、如幻如炎。生年六十七。召請諸親友。告別曰。桑楡葉落。藤鼠噛根。西月将没。仏光遥顕、寿終之期。在於今日。観音来迎。往生中品下生。言訖。即向西卒。聞者悲喜涙交集矣。

（七）下品上生　釈法敬

〈典拠〉真福寺本『戒珠往生伝』巻上（『塚本善隆著作集』第六巻、大東出版社、一九七四年）

釈法敬方比丘。不知何処之人。投宿童子寺。対釈迦霊像祈請降感。経歴三年。感夢像出妙身告白。汝念西方阿弥陀仏。生浄土中。成就不退功徳。即堪忍利益此土衆生。寤夢移居浄土寺。聞空中音曰。善哉大沙門。所願令満足。得生浄土已。還来利衆生。敬知命尽、語寺維那曰。吾至五更将捨命往生浄土。若得無生忍早来告汝。言訖合掌向西方而卒。音楽在

空。聞者十之一二。維那記遺約言相待其告。逝卒之後一十三年。来告其実。維那見敬身帯光明。相好具足。来住立旧室前。進問何故遅来。曰。雖生浄土。無生忍位甚難可階。依念本約。承仏威力暫来。得忍已後。自在受生。弘宣大師教。今来有三事。一者救父母。二者救師及梵行者。三者欲告汝寿終。汝料理僧事触事有罪。懺悔念仏業障便転。却後七日当生浄土辺地。若誠心捨衣鉢。償三宝物画形像。於其像前。専念彼本願。当生下品上生。又問。已救父母師僧不。曰父母罪重堕地獄。我出家曰。依許子出家弟子故。生第四天。天報尽後。可生浄土。師僧依勝他嫉妬罪。堕阿修羅中。当開化之。言已忽然不見。維那寤後誠心懺悔。捨衣鉢償三宝物。経［七］日命終。誠如所言告。全知識者是大因縁。此言在这个世界上效矣

（八）下品中生　阿闍梨覚真

〈典拠〉『続本朝往生伝』（日本思想体系七巻『往生伝・法華験記』岩波書店、一九七四年）

阿闍梨覚真者。本延暦寺無動寺浄侶也。初出洛陽。公請之用。後発菩提心。栖於鞍馬寺西谷。康範僧正世間之師也。仍老後補阿闍梨。昔供閻魔天百箇日。祈願曰。欲知命期生処死時并免貧道。夢。彼寺別当陽茂阿闍梨。自山出洛陽。初騎馬後歩行。依道嶮也。覚真見我装束。一同陽茂。又下馬歩行。出京之後。失陽茂在所。相尋之間。到春日与左衛門町。入西辺第八門。当於下品中生。左衛門町潤屋之地也。庄家比屋。百物自備。是免貧窶之相也。毎日誦法華経三重余年也。已及万余部。臨終之剋、猶誦此経。西向入滅。

（九）下品下生　釈恵進

〈典拠〉王古撰『新修往生伝』巻上（『続浄』巻十六）

十六釋惠〔考〕惠寶集作慧進。烏裎人也。性雄勇好任俠。年四十。覺身夢幻。乃之楊都高座寺出家焉。進以中年出家。不能窮賾圓頓。願誦法花。以畢殘報。用心勞苦。執卷病生。歎曰豈業障深厚。如來之教難勝耶。乃復發願。造經百部。以悔先障。始聚錢一千六百。一夕群賊來寇。進無驚撓。惟〔考〕惟寶集作唯俯身合掌。指其錢曰。此經錢也。出於檀越之家。吾無有焉。群賊聞之。愧赧〔考〕赧寶集作報而去。尒後果成百部。々袂〔考〕袂寶集作帙既滿。病亦隨損。進向所營功德。俱資淨土。願心深固。俄空中有聲。告曰汝事已辨〔考〕辨下寶集有願字亦已遂。其生淨土。非汝而誰〔考〕誰下寶集有進字聞之曰。進本不敢以冀上品。俱但下如〔考〕如寶集作品之下。亦無退轉矣。至齊永明三年。々八十餘。無病而卒。

〈霊告・四天王寺聖霊院絵堂関連略年表〉

承元元年	1207	11月	四天王寺別当補任（１度目）
承元２年	1208	11月	四天王寺別当辞任（１度目）
建暦３年	1213	９月12日	四天王寺別当補任（２度目）
建保４年	1216	１月	聖徳太子にまつわる霊夢を見る。夢中に太子が山王の新宮の御体と札に書いた漢字表記の和歌を慈円に賜る。その文字は仏法王法を興隆すべき姿を表したもので、和歌の形で以て漢字にて書き表されていたという。
建保６年	1218	１月	順徳天皇の女御立子（故九条良経の娘）が懐妊。慈円は述懐歌三首を詠み、四天王寺聖霊院に空印律師を派遣して参籠させ、７日間に渡って毎日この３首を詠みあげさせる。
		２月６日頃	慈円の命で聖霊院で歌を詠みあげていた空印律師が不思議な夢を見る。四天王寺の御前の海が増水し、その身を浸すというもの。これを儒者の菅原為長に夢合わせさせたところ、珍事が度重なる予兆であるという。
		２月24～25日頃	空印律師再び霊夢をみる。聖霊院の内殿から女房がこの歌を召し、それを常灯の火で焼いて、太子の御躰に懸けよと命じるという夢をみる。
		３月25日	空印律師、２月に見た霊夢を慈円に報告する。
		10月10日	立子、皇子を出産（後の仲恭天皇）する。
		10月11日	皇子誕生を受け、聖霊院に３首の和歌を進上して、報賽の意を表す。
		11月26日	皇子が立坊を果たす。
建保７年	1219	１月１日暁	慈円、聖徳太子にまつわる夢を見る（難波百首の付記には「別に之を記す」とあるが、その別記は知られず夢の内容は不明）
		１月１日 午後８時頃	懺法が終わった時、慈円と修行を共にする某僧が、「すぐに王法・仏法それぞれに関して和歌を詠め。詠めば誓願が遂げられよう」と太子の託宣を聞く。慈円、直ちに和歌２首を詠んでそれに応えた。 すべらぎの千歳をまつの春の色に藍よりも濃く染む心かな（王法） 難波津に法のみつ潮さしながら干潟になるをわれいかにせむ（仏法）
		１月４日	慈円、王法と仏法に関わる歌百首を詠み終え、空印律師に命じて、能書の僧・実還に百首を清書させた。
		１月５日	清書が完成し、慈円の元にもたらされる。１月１日に詠んだ王法歌の「春の色」が「春の宮」と書かれていた。空印が違えて音読し、それを聞いた実還がそのまま書写したものだという。春宮の将来を寿ぐかのような歌に変貌する。
		１月６日	慈円、１月１日からの事情を記録する。
		１月７日	慈円、法弟慈賢の、これは太子が詠ませた歌だ云々の言葉を聞き、瑞相への感激を綴り終える。その後、九条教家に清書を依頼して９日に終功する。
		１月15日	九条教家が百首を清書し、慈円が聖霊院内殿に奉納する（難波百首）。
		１月28日	将軍実朝暗殺
承久元年			以降、後鳥羽院のための祈祷を行わず、九条家のための祈りに推移する。 「毘沙門文殊八字表白」（霊告あり①）
承久２年	1220		再び霊告を得る（貞応元年の山王敬白によれば、内容は建保４年の霊告と同様か）。 この頃、『愚管抄』成立か
承久３年	1221	５月18日	「日吉社告文」（霊告あり②）
		５月～６月	承久の乱
		７月９日	承久の乱の騒乱の中で、即位したばかりの皇太子（仲恭天皇）が廃位される。
		８月１日	「良快宛譲状」（霊告あり③）
		秋	10首の述懐歌に読む
		10月10日	病床の中の無力感を12首の歌に託し、その詠草を聖霊院の本尊の前で焼かせる。
貞応元年	1222		「山王敬白」（霊告あり④）
		12月	「大懺法院再興願文」（霊告あり⑤）
貞応２年	1223	７月３日～４日	慈円、一時危篤に陥る。
		７月12日～13日頃	食事を摂れるようになる。
		９月28日	日吉社に参拝し、百日参籠する。
		11月	「山王十禅師表白」（霊告あり⑥）
貞応３年	1224	１月	東坂本で新年を迎える。
		１月20日	宿所の倭庄を出て、京都の白川殿上廊に宿す。
		１月21日	四天王寺に到着する。
		１月22日～29日	四天王寺聖霊院に７日間参籠する。「四天王寺聖霊院願文」に建保４年の霊夢を記す（霊告あり⑦）。
		２月６日～３月４日	絵堂の図本躰絵が出来上がる。
		２月７日	菅原為長とその子息が四天王寺に参詣する。
		２月	絵堂九品往生のうち上品中生担当の道家の和歌が完成する。
		３月４日	慈円、中風が悪化し四天王寺から京都に帰る。
		４月	絵堂九品往生のうち中品上生担当の西園寺公経の和歌が完成する。 絵堂竣工
		８月	「春日表白」（霊告あり⑧）
嘉禄元年	1225	９月25日	入滅（71歳）